

人権主日
説教

神にのみ頼って

＜ルカによる福音書9:1～3＞

金聖孝牧師(熊本教会)



イエスは弟子たちの中から12人を「使徒」(遣わされる者の意)を選び出されました。そして彼らに「力と権能」をお授けになりました。「力と権能」があるから使徒として遣わされるわけではありません。力も権能もない使徒たちにイエスがそれを与えられるのです。

さて、弟子たちがこの「力と権能」を受けて何をするのかと言いますと、「悪霊を追い出す」ことであり、「病気をいやす」ことであり、「神の国を宣べ伝える」という三つのことです。これらはいずれもイエスが使徒たちの前で行ってきたことです。つまり、イエスが行うことを使徒たちも同じように行う者とされていくのです。

使徒たちに与えられたこの三つの働きの根本にあるのは、人々に神が共におられることを知らせることです。この世で虐げられている人たち、苦勞している人たち、病に苦しんでいる人たちに、神が共にあることを告げ知らせるのです。

3節には派遣される使徒たちの心構えが記されています。「旅には何も持って行ってはならない。杖も袋もパンも金も持ってはならない。下着も二枚は持ってはならない」。つまり、何も持って行ってはならないというシンプルな教えでした。杖や袋やパンやお金は、旅人なら当然備えていなければならないものでした。今なら、お金はもちろんですが、携帯電話も持って行くなというところでしょうか。なくてはならないもの、これなしには旅に出られないようなものを持って行くなとイエスがおっしゃるのはなぜでしょうか。それは全面的に神に頼りなさいというイエスのメッセージではないでしょうか。福音を宣べ伝える者こそ、神のみを頼みとしなければならない、そういうことではないでしょうか。違った言い方をするならば、イエスが求められたのは、自分でこれが必要だ、あれが必要だと考えていく旅ではなく、神のご計画を祈りながら聞き、行く先を知らずとも、神に信頼して歩んでいく旅をなささいということではないでしょうか。神はわたしたちに必要なものをご存じで、そしてそれを備えてくださる神である、そういう信仰こそが使徒としての信仰であり、使徒の生きる宣教の旅、道なのです。

では12人は遣わされた地でどのような働きをしたのでしょうか。続く6節には「十二人は出かけて行き、村から村へと巡り歩きながら、至るところで福音を告げ知らせ、病気をいやした」とあります。かつてイエスご自身がこうおっしゃっ

ていました。ルカ4:43「しかし、イエスは言われた。『ほかの町にも神の国の福音を告げ知らせなければならない。わたしはそのために遣わされたのだ』」。弟子たちは、イエスより「力と権能」を得て、そして、イエスが語られたことを実際に行う者となったのです。そしてそれは「至るところで福音を告げ知らせた」というのですから、ユダヤを越えて異邦人世界、すなわち全世界への伝道と広がっていったのです。使徒の宣教はそのまま教会の宣教と捉えてもいいでしょう。教会もまた、イエスより「力と権能」を得て宣教していくことができるのです。

2016年4月14日16日の熊本地震によって甚大な被害を受けた御船町にて、在日大韓基督教会社会委員会と日本基督教団九州教区は宣教協約の実質化として被災地での支援活動に取り組んでいます。2016年6月避難所で始められた「ドリームカフェ」は現在仮設住宅へと場所を変え活動を継続しています。毎週水曜木曜の朝10時から夕方まで仮設住宅10カ所を巡回して不安の中にある被災者に直接的な言葉は使わなくとも、神は被災者と共におられ、生きる希望と行く道を備えておられるということを伝えていきます。今では社会福祉協議会をはじめ仮設住民の方々からより多く開催してほしいと要望されています。それこそキリスト者のグループはこの世の人から見るならば小さく、力もないかもしれませんが、私たちはイエスより「力と権能」を、あの使徒たちのように受けたのです。だからこそ、神に感謝を捧げ、被災地で奉仕ができるのです。上よりの力を受けずして、どうして支援活動を続けていくことができるでしょうか。

熊本教会も、被災した教会と牧師館の再建が待ったなしです。教会再建と被災地支援活動という宣教の課題を前にして、もう一度、12人の使徒たちのことを思います。何も持たずに遣わされていく彼らの気持ちはどのようなものだったのだろうか。不安で心細かったのだろうか。いえ、おそらくそうではなかったと思います。なぜなら彼らは何も持たない者ではなかったからです。イエスから「力と権能」を託された者たちです。それは神のみを頼る信仰と言い換えてもいいでしょう。これ以上の勇氣と希望はありません。

この神のみを頼る信仰を持って、被災地熊本という派遣された地で、神の国を在日大韓基督教会のすべての使徒と共に宣べ伝えていきたいと願っています。

在日コリアン文化の創造と多文化共生社会を目指して、在日本韓国YMCAは皆様と共に歩みます。



東京◆ホテル：東京で一番安く便利な宿泊研修施設。フロントは日・韓・英語に対応、24時間営業。
10名様～200名様のお会議及び宿泊研修(50名)も可能。
◆スペースYホール：200席の多目的ホール。セミナー・コンサートなどに対応。
◆韓国文化教室(チャング・カヤグム・舞踊) ◆韓国語講座
◆YMCA東京日本語学校(3ヶ月～2年、短期研修)
関西◆にほんご教室(新規開講・募集中) ◆韓国民俗芸術科(舞踊・チャンゴ)

税込	平日	休日
シングル	¥6,700	¥6,200
ツイン	¥10,500	¥9,800
トリプル	¥13,500	¥12,600
※朝食¥200(宿泊者価格)		

在日本韓国YMCA <http://www.ymcajapan.org/ayc/jp/> *会員及び教職者割引有。詳しくはお問い合わせください。

東京韓国YMCAアジア青少年センター 〒101-0064 東京都千代田区猿樂町2-5-5 ☎03-3233-0611
関西韓国YMCAアジア青少年センター 〒537-0025 大阪市東成区中道3-14-15 ☎06-6981-0782

2017年全国長老研修開催

主題：KCCJに必要な機構改革とは何か？



2017年全国長老研修会が「KCCJに必要な機構改革とは何か？」を主題として、7月16日（主）～17日（月）ホテル・クライトン新大阪にて開催された。全国から長老、全国女性連

合会役員ほか55名が参加し、現在KCCJが直面している様々な問題に対して提案されている機構改革について、情報共有と意見交換を行った。

一日目は夕食後、開会礼拝をささげた。鄭然元牧師より「長老の資格と役割」（テモテ第一3：1～7）というメッセージが与えられた。その後、今回の主題に関する基調講演と発題がなされた。機構改革委員会委員長の李根秀牧師からKCCJの直面する問題点と委員会で討議された経緯について、中江洋一牧師から総代権について、金成元長老から総会財政について、金秀男長老から教職者退職年金について、それぞれ現在の問題点と改革案に関する発題がなされた。引き続き五つの分団に分かれて約1時間半の討議を行った。

二日目は、朝拝会で金道栄長老が「祝福と契約」（創世記9：12～17）の題目で証しをされた。常に教会を優先された故金徳成牧師の伝記に触れ、また家族と自身の困難の中で信仰が強められ、神の祝福と契約を確信したことが語られた。朝食の後、各分団の討議内容が報告され、続いて吉井秀夫長老の司会で総合討論を行った。総代権、財政問題、年金問題に関する情報共有がなされ、またいずれもKCCJ組織の根本に関わ

る喫緊の問題であるという共通認識が得られたが、改革案については賛否両論があり、問題の性格上慎重かつさらに討議を重ねるべきであると考えられた。討論の後、林英宰長老から「東京教会問題」に関する経過と調停委員会の進捗状況について報告がなされた。閉会礼拝では、金性済牧師より「長老とは－聖書に立ち返り」（民数記11：16～17、テス1：5～9）と題するメッセージが与えられた。

今回の研修会では、時代の変化とともに生じたKCCJの問題点に関して情報共有し、問題の深刻さを共通認識することができた。2日間にわたって熱心な討議がなされたが、解決法や改革案については、参加者の所属する個教会や地方会など背景や立場が異なるため一定の見解には至らなかった。しかしこれらの討議を通して問題を共に分かち合い、解決のために一致する心が与えられたことは恵みである。KCCJの将来は神のみわざを行う限り希望がある。御心を尋ねつつ感謝を込めて祈りと願いをささげるならば、人知を超える神の平和がイエス・キリストによって私たちの心と考えを守ってくださることを信じる。

（報告：尹聖哲長老）

青年会全国協

青年会夏季修養会開催

豊かさ／弱さ、自由と和解テーマに主題講演



2017年8月9日～12日にかけて、青年会全国協議会の夏季修養会が、長野県木崎湖で開かれた。32名の青年が各地方から集まり、恵みのひとときを持った。とくに西南地方の青年が参加したことが大きな喜びであった。

昨年の夏季修養会にはじまり、今年2月の青年研修会における米国のゴスペルユニットとの出会い、そして青年自らの霊的成長の過程を経て、賛美の大切さを取り戻しはじめた青年たちの活気を感じた。今年は、青年が作曲したオリジナルの曲に、参加者全員で歌詞を練り上げるワークショップをおこなった。グループにわかれて討議をし、一つに練り上げられた詩には、表面的な喜びばかりでなく、青年たちの日常に埋め込まれたマイノリティとしての苦悩や葛藤がにじみでいた。しかし、そこには、闇にしか見えない状況にこそ主の光が注がれることが言外に語られていた。

「祈ってばかりで教会の外に出ないでいいのか？」「そういうあなたはちゃんと祈っているのか？」この二つの問いが発せられた昨年の夏の修養会を経て、青年たちは、二分論を超えた地平に立とうと模索していることを強く感じる。個と神、信仰と社会の関係を「豊かさ（カラフル）」というキーワードを通して、張晶洙代表が伝えた主題発題、現代的なアイデンティティの問題を「豊かさ／弱さ」、「自由」と「和解」をキーワードに投げかけてくれた孫裕久牧師（日本基督教団）の主題講演は、青年たちに多くの刺激を与えた。また、各地方会の教役者（鄭有盛、崔鐘福、宋南鉉、尹善博の各牧師）たちも積極的に駆けつけて応援した。青年たち相互の出会いと互いに感じた霊的な喜びを備えてくださった主に感謝をささげ、また、青年たちの自主性を主が備えてくださることを信じ、総会はこれからもゆるやかな見守りと励ましと支援を続けていく必要性が感じられた。

（信徒委員長 金迅野）

2017年度宣教師研修開催

7名が参加して総会の宣教理念など学ぶ

宣教協約を結んでいる韓国の各教団から派遣されて本総会に加入し、任地へ赴くことになる宣教師教育のための研修会が、7月11日～20日まで総会神学校に於いて7名が参加して行われた。

教育科目は、在日大韓基督教会の神学と宣教理念、歴史、憲法と規則、在日同胞の歴史、日本のキリスト教会の神学、教会史、エキュメニカル神学、儀式と礼典に加え、総会事務局を訪問して日本の社会保障・総会年金や総会行政などの説明も受けたほか、日本基督教団、在日本韓国YMCA、日本キリスト教協議会（NCCJ）、RAIK、マイノリティ宣教センターなども訪問した。

特別講師として、日本聖公会の卓志雄司祭を招いて、日本で活動している異端宗教の動向についての講義と、朱安大学院大学の金光晟教授より、中国の宣教に関する講演が行われた。

研修場所が総会神学校であったため、7月16日の主日礼拝は西新井教会でささげ、関東地方会所属の教会をいくつか訪問し、温かい歓迎と食事のもてなしを受けながら各教会の歴史や状況などを聞いて実のある交流の時を持った。



韓日教会青少年交流ツアー開催

韓日16名が歴史共同学習と礼拝交流体験

去る 7 月 31 日 - 8 月 3 日の 3 泊 4 日間、総勢 16 名(中部地方会 6 名、教団中部教区 7 名、日キ近畿中会中部地区 3 名)の参加者で、「ともに生きる未来を見つめ」韓日教会青少年交流ツアーが韓国において実施された。

今年で 5 回目を迎えるこのプログラムは、未来の韓日平和の構築のための働き人となるべき韓日と在日の教会青少年の歴史共同学習と礼拝交流体験を実施するというもので、在日大韓・日本基督教団・日本キリスト教会・韓国基督教長老会韓信教会の青年たちを中心に行われた。

このツアーを全面的に支持し、受け入れ教会となってくれたのは、韓国基督教長老会韓信教会(姜龍揆牧師)であり、

宿泊とバス移動など大きな援助を受けることになった。

プログラムは、一日目は初期韓国基督教巡礼ツアー見学をソウルでし、その後韓信教会において開会礼拝をささげた。



二日目は、京畿道安山市へ行き、3 年前に起きたセウォル号沈没事故、476 名乗船し、死者 299 名・行方不明者 5 名・捜索作業員の死者 8 人という犠牲者の合同焼香所を訪ねた。生徒 250 人、教員 11 人が死亡もしくは行方不明となった安山市にある檀園高等学校生徒の遺族の父母たちに直接話を聞くこともできた。

三日目は、3 つのグループに分かれてソウル観光をし、楽しい交流が持たれ、最後のプログラムとして、韓信教会水曜礼拝(説教:草地大作牧師、教団名古屋中央教会)参加と日本からの参加者による特別賛美がなされた。神様の恵みにより 3 泊 4 日間の中で、韓日における平和と和解、共生について真剣に語り合い、深い交わりがもたらされた。来年は、日本に韓国の教会青少年が訪問する予定である。(報告:新井由貴)

関西地方会

合同夏期学校を開催

『私たちの捧げもの』テーマに 23 名の児童参加



去る、7 月 16 日(主)から一泊二日の日程で、『私たちの捧げもの』というテーマのもとに関西地方会教育部主催の合同夏期学校が京都南部教会において開催された。参加人数は、子供 23 名、大人 19 名、9 教会が参加した。

開会礼拝の説教は、教育部長の朴栄子牧師が行い、その後、オリエンテーションと分級①をもった。夕食は、男性陣が汗だくになって焼いてくださったバーベキューを美味しく頂いた。その後、子供達と一緒に花火を楽しんだ。

二日目は、朝の祈りを朴時永牧師が導き、ラジオ体操を金明美先生が指導された。その後、分級②③を持ち、昨日に引き続き神様に献げるとはどういうことかを学んだ。昼食は、合同夏期学校の名物とも言える申容燮牧師が考案した流しそうめんを子供達と共に頂いた。閉会礼拝の説教は、許伯基牧師が行い、最後は、清水のぞみ師母の導きのもとで、各分級の先生から教わった音楽やダンスなどを献げ物として子供達が真心を込めて神様に献げた姿は感動的であった。

今年も合同夏期学校が無事に終えられたことを神様に感謝し、また教育部部員をはじめ、各教会から惜しみなく奉仕をしてくださった方々、特に場所を提供して下さった京都南部教会の皆様へ、心からお礼を申し上げたい。(関西地方会 教育部)

西部女性会

一日研修会を開催 武庫川教会で「讃美について」を学ぶ

西部地方教会女性連合会の「一日研修会」が 7 月 25 日(火)午前 11 時より武庫川教会において開催され 43 名が参加した。

開会礼拝は李孝子青年部長の司会ではじまり、梁榮友牧師(武庫川教会)による「今、何を見ているか?」(ヨシヤ記 3:1~6)と題してのメッセージがあった。

昼食は、武庫川教会女性会の心のこもった美味しい料理を共にいただいた。

午後からの研修は尹孝仁音楽部長の司会で、講師に武庫川教会で執事として聖歌隊を長年指導され、29 年前に復活イエスキリスト教会(単立)を創立された康成安牧師を迎えて「讃美について」の講義があった。神様から頂いた声を用いて、神様に賛美と栄光をささげ恵み豊かな研修会となった。

(報告者:尹豊子)



西部女性会

三役拡大連席会議開く 第 30 回修養会や信徒の集いなどを決定

西部地方教会女性連合会第 16 回三役拡大連席会議が 5 月 30 日(火)午後 1 時より西宮教会において出席者 20 名(6 教会)で開催された。黙祷の後讃美歌 508 番を讃美し、大山京子副書記がお祈りを捧げた。続いて崔美恵子会長の司会により三役拡大連席会議が始まり 2017 年度の活動計画の討議が行われた。

今年の主な活動は、①第 61 回全国教会女性連合会定期大会・研修会(6 月 22~24 日)参加、②第 30 回修養会、③第 15 回信徒の集い、④第 21 回復活節合同讃美礼拝、⑤一日研修会(讃美と祈り)、⑥勸士会について、⑦世界祈祷日参加などである。今年西部地方教会女性連合会修養会が 30 回目であるため、韓国蔚山老会を訪問する提案もあった。その後、参加した教会の現状と祈りの課題について参加者全員で心をひとつにして祈った。西宮教会女性会の皆様への心のこもったおもてなしで交わりの時をもち金永柱牧師の祈りで閉会した。(報告者:尹豊子)

西南地方会

高文局長老将立式挙行 02 年から別府教会で執事として奉仕



去る 2017 年 7 月 16 日に西南地方会別府教会において、高文局長老将立式が執り行われた。初めに辛治善牧師の司会のもと礼拝を行い、引き続き西南地方会長の李惠蘭牧師の司式によって長老将立式が行われた。

金聖孝牧師(熊本教会)が将立される長老に、また朱文洪牧師(小倉教会)が信徒に対する勧めの言葉を述べた。また、吉武二郎牧師(日本基督教団別府野口教会)と金仁果牧師(福岡教会)の祝辞があった。

高文局長老は、1966 年韓国で生まれ、1992 年に留學生として来日してから 2001 年まで福岡教会で信仰生活を送り、執事として仕えた。2002 年から別府教会に移籍し、青年会部長及び聖歌隊の指揮者として奉仕し、2011 年から按手執事として別府教会を支えてきた。

世界改革派教会共同体(WARC) ライプチヒ総会に参加して(1)

総会長 金 性 済 牧師



2010年6月に、世界改革派教会連盟(WARC=World Alliance of Reformed Churches)は、改革派エキュメニカル協議会(REC=Reformed Ecumenical Council)と合体して、世界改革派教会共同体(WCRC=World Communion of Reformed Churches)なり、それから7年目にあたる今年6月29日から7月7日にかけて、ドイツ・ライプチヒ(「メッセ」<国際会議場>)で、世界のおよそ250教派から、約1000名の総代・訪問者をもって開催された。

WCRC本部は、現在ドイツ・ハノーバーに置かれているが、この度の総会があえてドイツで開催された背景には、ルター宗教改革500周年を意識していたこと、また後述の通り7月5日に調印される『義認に関する共同宣言』調印式がルターの宗教改革の本拠地、ヴィッテンベルクにて執り行われるうえでライプチヒは地理的に便利であったことが考えられる。

2004年にWARCは、『アクラ文書』(今日では“The Accra Confession”<アクラ信仰告白>と呼ばれる)を発表したが、その文書は、この21世紀世界がグローバル資本主義の暴走によって、「帝国」(主権国家の国境をまたぎ、貧しい周辺国から富める中心に富・資源・低賃金労働力を吸い上げる政治経済構造)的支配の様相が増し、世界の貧富の格差が激化し、環境生態系破壊が著しく進行している事実に対する危機意識を表明し(『アクラ信仰告白』7-14)、その現実を踏まえて、“Life in Fullness”(豊かに受けるいのち<ヨハネ福音書10:10>)の主題のもとに、明確に「不正義により犠牲にされる人々の側に立ちつつ正義」(Justice standing with victims of injustice)を追求する宣教の道を提示した。

この度のWCRC総会も、それ以来、グローバル資本主義の暴走、テロの蔓延、難民急増、そして難民排斥・人種差別・排他的ナショナリズムの一層高揚する中、明確にアクラ信仰告白の路線に立脚しながら、正義の問題に焦点を当てる流れとなった。

きわめて印象的だったのは、1970年代、旧約聖書神学(G.フォン・ラートなど)の成果とE・ブロッホの『希望の原理』の哲学からの啓発に立脚しつつ、『希望の神学』(1964年)を

上梓し、世界に大きなインパクトを与えた組織神学者、ユルゲン・モルトマン(91歳)が神学講演を行ったことである。彼の講演のテーマは、「死の神々に直面する生ける神」(Living God who bring life in face of gods of death)。講演の中で、モルトマンは、「死の神々」とは貪欲なグローバル資本主義、人種差別、ナショナリズム、そしてテロリズムであると指摘した。そして、この死の神々の蔓延する世界において我々キリスト者は、神の約束への希望を失わないがゆえにこの現実世界の中で、正義と自由と人間性への情熱を失わず闘い続けることができると主張した。今一つモルトマンの感銘深い指摘は、宗教改革以来、プロテスタント教会が強調してきた、ただ信仰によってのみ義とされる義認の恩寵を、我々キリスト者はこの世界の中で犠牲にされる人々の痛み・苦しみと直面しながら受け止めなければならない、という言葉であった。

総会での総代による議論のテーマは、教会の宣教と正義、そして特に印象深いテーマとして男女間正義(ジェンダー・ジャスティス)、さらにWCRCに所属する教会の多様性と宣教の一致の道についてであった。総会の席上で男女間正義の問題がいくら主張されても、WCRCに所属する世界の諸教派にはいまだに女性牧師・長老を認めない現実を実際には抱えているところがある。さらには、同性愛問題(肯定的受容・按手・同性愛結婚の承認など)についてはなおさらである。しかし、WCRCとして現在たどり着けるところとは、同性愛者に対する差別を許さない、という認識における一致である。

会議は、全員が一堂に会する全体会議と、17の相互理解分科会(Discernment Groups)での議論で構成され展開された。大変ユニークなことは、WCRCはすべての会議において、総代がオレンジ色カード(肯定的)とブルー色カード(否定・消極的)を手渡され、それをもって自分の気持ちを表明する「コンセンサスに基づく決定づくり」(Consensus-based decision making)という方式を採用していることである。これは、これまでの会議ルール(「賛成」「反対」票、過半数・2/3表決)とは異なり、忍耐強く限りなくコンセンサスをめざし、ブルー色カードの意見に耳を傾けて、皆が合意する道をめざし、どうしても強力な反対の残り続ける場合、執行委員会にもう一度差し戻すという会議方法である。筆者は、数年前、オーストラリア合同教会の総会に参加した時もこの方式を体験した。

(次号に継続)



公 告

在日大韓基督教武庫川教会は、増大する信徒の便宜に供するとともに、子供のための教育施設等、宗教活動基盤の充実を図るため、下記の通り不動産を取得することを広告いたします。

土地：兵庫県尼崎市稲葉元町三丁目77番地 地積 61.12㎡、兵庫県尼崎市稲葉元町三丁目78番地(8番10) 地積 15.79㎡
建物：所 在 兵庫県尼崎市稲葉元町三丁目77番地
構 造 鉄骨造亜鉛メッキ鋼板葺二階建、床面積 1階 30.37㎡ 2階 25.92㎡

在日大韓基督教武庫川教会
代表役員 梁榮友
役員一同